

# SMF

## サプライチェーンにおけるサステナビリティ診断ツール（SDDツール※1）

『認識編』 Version2.1a（2014年12月10日）

『実践編』 Version1.1（2015年10月20日）

※1 Sustainability Due Diligence Tool

### 回答の手引き

#### 【背景と問題意識】 海外の現地法人やサプライチェーンにおけるCSRリスクの増大

近年のグローバル化の中で、安価な労働力、豊富な資源、拡大する消費市場を求めて、**現地法人の形で日本企業の海外進出(特にアジア)**が続いています。しかし、**進出先での「CSRリスク」を認識しないまま海外に出て行くこと**から、現地で環境や人権・労働にかかわる問題をNPOなどから突然指弾されて、トラブルを抱え込むケースが増えています。

このことは**海外からの原材料・資材調達**においても同様です。直接的な契約関係にない2次・3次の海外調達先であっても、そこで環境や労務の問題が起きると、遡って**発注元企業(多くの場合、最終ブランド企業)の責任が厳しく問われます**。これらを「**サプライチェーンのCSRリスク**」と呼びますが、近年、国内外の有名な大企業がこの問題に遭遇しています。

業種や操業地等によりサプライチェーンのCSRリスクは異なりますが、**コンプライアンス・社会貢献中心の「日本型CSR」は海外(特に新興国・途上国)では通用しません**。ここにCSRリスク要因が潜んでいます。それゆえ、発注元企業のCSR調達における「**SDDプロセス※2**」が不可欠です。

#### ※2 Sustainability Due Diligence Process

SDDプロセスとは、簡単に言えば、サプライヤーに対する「CSR監査」である。Due DiligenceについてISO26000では次のように定義している。「企業活動のライフサイクル全体における、企業の意思決定および事業活動によって起こる、実際のおよび潜在的な、社会的・環境的・経済的なマイナスの影響を回避し軽減する目的で、マイナスの影響を特定する包括的で積極的なプロセス」

#### 【目的と用途】 何をめざし、何を診断するのか？

- ① 日本企業のサプライチェーン全体のサステナビリティの向上のために、**発注元企業(バイヤー)によるサプライヤーに対する「CSRリスク」の認識と対応の促進**が基本的な目的です。⇒ 二者監査用の雛型の提供
- ② 本SDDツールは、サプライヤーの「気づき」を目的として、認識や仕組み・規定を問う『**認識編**』と具体的な取組・実践を問う『**実践編**』から構成されます。  
【認識編と実践編の違い】  
「認識編」は「**入門基礎編**」であり、サプライヤーのCSR(デューデリジェンス)の認識や規程・仕組みの有無を問うもの。⇒CSRマネジメント体制の整備状況を問う。  
「実践編」は「**現場応用編**」であり、サプライヤーの業務現場で仕組みが機能しているのか、質問項目の実施状況を問うもの。⇒必ずしもパフォーマンスを問うものではない。
- ④ 本SDDツールは、海外を意識したサプライチェーンのCSRリスクに対する認識やマネジメント体制、さらに実践状況について、**サプライヤー自身が「自己評価」**するためのツール(SAQ)です。
- ⑤ 本SDDツールは発注元企業(バイヤー)にとって、直接的には**第一次調達先・発注先(1st Tier)のCSRリスク評価ツール**となります。第二次以降のサプライヤーについては、第一次サプライヤーに啓発を要請しています。

#### 【特徴】

- ① 「**回答者**」として中堅・中小企業のサプライヤーを想定し、**アンケート形式**で簡潔な診断評価の項目を厳選しています。
- ② 診断評価体系は、海外適用を視野に入れて、原則として、CSRの世界標準である**ISO26000に準拠**しています。また、EICCやJEITAなどを参考にするとともに、SMF独自の項目も採用しています。
- ③ 大項目として「**中核主題**」、中項目として「**課題**」を採用し、具体的な「**診断項目**」(質問)は「**関連する行動及び期待**」を踏まえつつ、独自の視点で設定しました。⇒ISO26000の参照番号(認識編のみ)

- ④ 診断項目は、日本企業が実際に海外で経験したCSRリスクの事例も考慮して選択しています。
  - ⑤ 診断項目には、スコアを記入する「**必須**」とスコア対象外の「**自由記述**（取組や実績を含む総合的な自己評価）」の二種類があります。
  - ⑥ 必須の診断項目は、0～4の**5段階評価**のプルダウン・メニューにより「**スコア**」（点数）を選択します。ただし、「**不明**」と「**非該当**」を含みます。
  - ⑦ 診断項目の重要性などによる「**重み付け**」は可能ですが、本SDDツールには適用していません。
  - ⑧ 本SDDツールでは「**一般CSRリスク**」を想定しており、**業種別「特定CSRリスク**」は反映していません。
- ★ まずはサプライヤー自身によるCSRリスクの認識が重要であるため、「1.CSRにかかわるコーポレート・ガバナンス」では、ISO26000の項目に加え独自の評価項目を多く採用しています。実際の活動局面では、人権、労働や環境汚染の問題が主たるCSR課題と位置付けています。

## エクセル入力時の留意点（シート「SDDツール」『認識編』、『実践編』参照）

- ① 桃色のセル（診断項目）が、具体的な質問です。その右側にある回答欄（E列）の「**未入力**」セルに、スコア（整数）をプルダウンで選択してください。
- ② 認識編の質問は75の「**必須**」と14の「**自由記述**」、実践編の質問は81の「**必須**」と14の「**自由記述**」から構成されています。自由記述は「**スコアなし**」で、CSRの改善に向けた認識や注力した体制・仕組みの構築、さらにCSRの取組の現状や課題を総合的な自己評価をしてください。
- ③ 質問ごとに回答水準の目安として、**スコア「0」「2」「4」の説明**がありますが、回答に当たっては**中間の「1」や「3」の選択も可能**です。
- ④ **回答欄（E列）が空白の場合**、エラーとなりますので、「未入力」状態から0～4でスコアを選択してください。ただし、回答するのが困難の場合は「**不明**」、また事業特性からみて質問が自社とはまったく関係ないと判断した時は「**非該当**」としてください。
- ⑤ 各質問にスコアを入力した後、その評価の根拠を「**確認資料**」欄に簡単に記入してください。
- ⑥ 質問の4階層グループまたは質問ごとに「**展開**」と「**折りたたみ**」ができますので、最左列の階層ボタン「+」「-」で調整してください。
- ⑦ 入力支援と管理用に、**最右下部に入力状況を表示**しています。
- ⑧ 本ツールでは「スコア」入力以外を保護していませんので、既に記入されている文字や数値や行列を変更しないようにお願いします。
- ⑨ スコアの入力サンプルとして、**予め数値が記入されているセル**がありますが、実際の入力に当たっては**全てクリア**してください。
- ⑩ エクセルの自動保存機能も有効ですが、回答入力ごとの**手動での保存**を推奨します。
- ⑪ 質問文にある専門用語（※）については、クリックすると別シート「用語解説」の該当箇所に移ります。「**戻る**」を押すと、入力シートに戻ります。

## スコア（評点）について

- ① 「**0.診断対象範囲**」は評価対象外ですが、必ず該当項目に●を記入してください。
- ② 7つの大項目（中核主題）ごとの質問数にかかわらず、**それぞれ最大100点**となるように自動計算されます。
- ③ 各大項目（白抜文字）の右上部にそれぞれのスコア（最大100点）が表示され、シート最右上部には「**総スコア合計**」（最大700点）と「**平均点**」（最大100点）が表示されます。
- ④ 大項目別（中核主題）のスコアを、別シート「診断結果集計」に**レーダーチャート**で図示しています。

## 印刷について

- ① **質問の回答グループの展開状況に応じて自動的に改ページ**しますが、**基本的には画面に表示されている部分が印刷**されます。
- ② 各ページのフッターには印刷日時とページ、ファイル名を表示しています。